

チーズケーキと生チョコムース、それからピスタチオのアイス

組合員 S.K

近所にある行きつけの洋食店が閉店した。デザートのおいしい店で、チーズケーキと生チョコムース、それからピスタチオのアイスがとくに好きだった。スイーツは日本一だと思っている。いや、正確にはほかと比較しておいしいとか、そういう問題ではなくてとにかくこのスイーツが私は圧倒的に好きで、それはきっと何年も通っているうちにますます好きになったということだと思う。

食の好みに限らず、なにかを好きになるということは、つまるところ何度も同じ体験をして、ますます好きになるということだ。という言い方は文法的にヘンかもしれないが、なにかを好きになったり大切に思う気持ちはそうやって育まれる。私はその店に17年かよった。しょっちゅう行っていたわけではない。半年とか、もしかしたら1年近く行かないこともあったかもしれない。「デザートはおいしいけど、料理はいまいちだよ」なんて家族と話したこともあった。つまり私は、家の近くに絶品スイーツの店があるありがたみを分かっていた。ミシュランに掲載される店より、食べログで高評価の店より、近所にある行きつけの店をこそ大切にしなければならない。そのことに気がついたのは、その店が閉まる半年ほど前のことで、不思議なことに、それから程なくして閉店を知ることになる。閉店が決まってからはしょっちゅう行った。最後の2ヶ月くらいは毎週行った。いくら食べたところで閉店したら永久に食べられなくなるのは同じで、だから閉店直前に毎週かよったことにどんな意味があったのかと考えると、それはただただ閉店を惜しむ気持ちがあった、というより惜しみたかった、ということのように思える。かよえばかようほどつらくなる。行きたびに「もうすぐ食べられなくなるんだな」という気持ちがわいてくる。しかし私はむしろ、そういう気持ちを味わいたいと望んでいたような気がする。人生には、あっさりと済ませてはいけないことがある。とくになにかを失ったり、大切なものとの別れがあるとき、人はそのつらさをしみじみと味わう。家族や親しい友人との別れを経験したとき、つらいから早く忘れてしまおうとは思わない。つらい気持ちがよみがえろうとも、折に触れて繰り返し思い起こす。そこには思い入れがある。人やものを大切に思う気持ちが込められている。17年という月日をつうじて、そのレストランは私にとって大切な存在となった。私のつらさはつまるところ、チーズケーキが食べられなくなるのではなく、大切な店がなくなることだった。閉店直前は連日満席、店の外には行列ができた。同じように閉店を惜しむ気持ちを持つ人が多くいたことを知った。

ところで最近、『アマゾンの倉庫で絶望し、ウーバーの車で発狂した』（ジェームズ・ブラッドワース 著、濱野大道 訳）という本を読んだ。イギリスのジャーナリストである著者が低賃金労働者の職場へ潜入し実際に働くことでその実態を探るという内容だ。アマゾンの巨大な倉庫では、注文された商品を棚からピックアップする仕事をする。仕事中は常に動きを監視できる端末を持たされ、どこかで見ているマネージャーから、仕事のペースが落ちていからスピードアップするように、などと言われる。倉庫のなかを一日平均16キロ歩き、

仕事が終わるころには足がむくみ化膿する。商品を盗まないよう頻繁にボディチェックもされる。体調不良で仕事を休むと懲罰ポイントが加算され、それがあるところまで達するとクビになる。がんばれば正社員になれることをチラつかされるが、実際になれる可能性は限りなく低い。そんななかで労働者の心は当然のようにすさんでいく。30 分の昼食休憩には人気メニューを食べようとわれ先に食堂へ人が押し寄せる。あたりには不満やいら立ちの声が響く。

くわしくは本書を読んでもらいたいが（いや読まなくてもいいが）、ここで描かれる世界は先に述べたレストランやそれを惜しむ人々とは対極のまずしい世界、そしてそれと自らの現状を比較して自分はまだ恵まれていると考えるのもまた、まずしい発想に違いない。自分の現状は他者との比較によって認識されるものではない。だから若い人が戦時中の日本のことや、海外での内戦とか貧困の話を聞いて「自分がいかに恵まれているか分かった」などと言うのはまずしい発想に毒されている。本書のアマゾンの話は「マウスをクリックするだけで欲しいものを注文し、それを翌日に手にすることができる。安価な商品が手に入る、それはもはや当たり前のことになった。しかしその商品が安いのは、この章で説明してきたような条件下で製造されているからにほかならない」と締めくくられるが、これもまた考えがまずしい、というかそこに意志を感じない。この考えはそのまま、コロナ禍における医療現場とわれわれの生活に当てはまってしまう。しかし実際の世界は、アマゾンの労働者の上に便利な生活があるとか、医療従事者のがんばりの上にわれわれの生活が成り立つような一方的なものではない。わたしたちはもっと影響しあって生きているはずだ。たとえば子供は育てられるだけの存在ではない。子育てをつうじて親は成長し、また忘れかけた子供のころの感情をよみがえらせることもある。親子は互いに影響しあう。子供が親に与える影響は、子供が成長するにつれ、親が無自覚に子供に与えた影響の反射を多分に含んでくる。そういうのはたいてい自分の嫌いなところで、だから子育てはむずかしい。子育てを論じたいわけではない。与えた影響は返ってくる。そして悪い影響を与える人間はいつも無自覚だ。労働力を搾取し、まずしい世界をつくる人間は、いつか自らがまずしくなる。アマゾンの社長はたとえ会社がつぶれたって一生お金には困らないはずだ、という発想がだからまずしいと言っている。医療現場に無理を強いる現在の社会は、いつか（すでに？）その無理がツケとなって返ってくるのだろうが、わたしが言いたいのはそんなことではなく、この本を読んだところで結局それは現状の追認にすぎず、それで人の心が揺さぶられるわけでも希望や勇気が持てるわけでもない。

おいしいチーズケーキを 20 年作りつづける、そこに 17 年足を運ぶ。そうやって人と人との関わり、影響しあい、なにかを大切に思う心がゆっくり育まれる。人間関係とはそんなものだ。最後にその店に行ったのは閉店の前日、入口には開店を待つ人たちが列を作っていた。多くが花束や紙袋を手にしていて、1 時間ほど待って席につく。最初は野菜のスープ、そしてサラダ。いつもとなにも変わらない。メインの肉料理、豚肉のピカタを食べデザートがくる。これが最後のチーズケーキになるという実感は、なにもなかった。